

544

104

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50^{6m} 1 2 3 4 5

始



納本

自選歌集
來往問人
與謝野晶子著

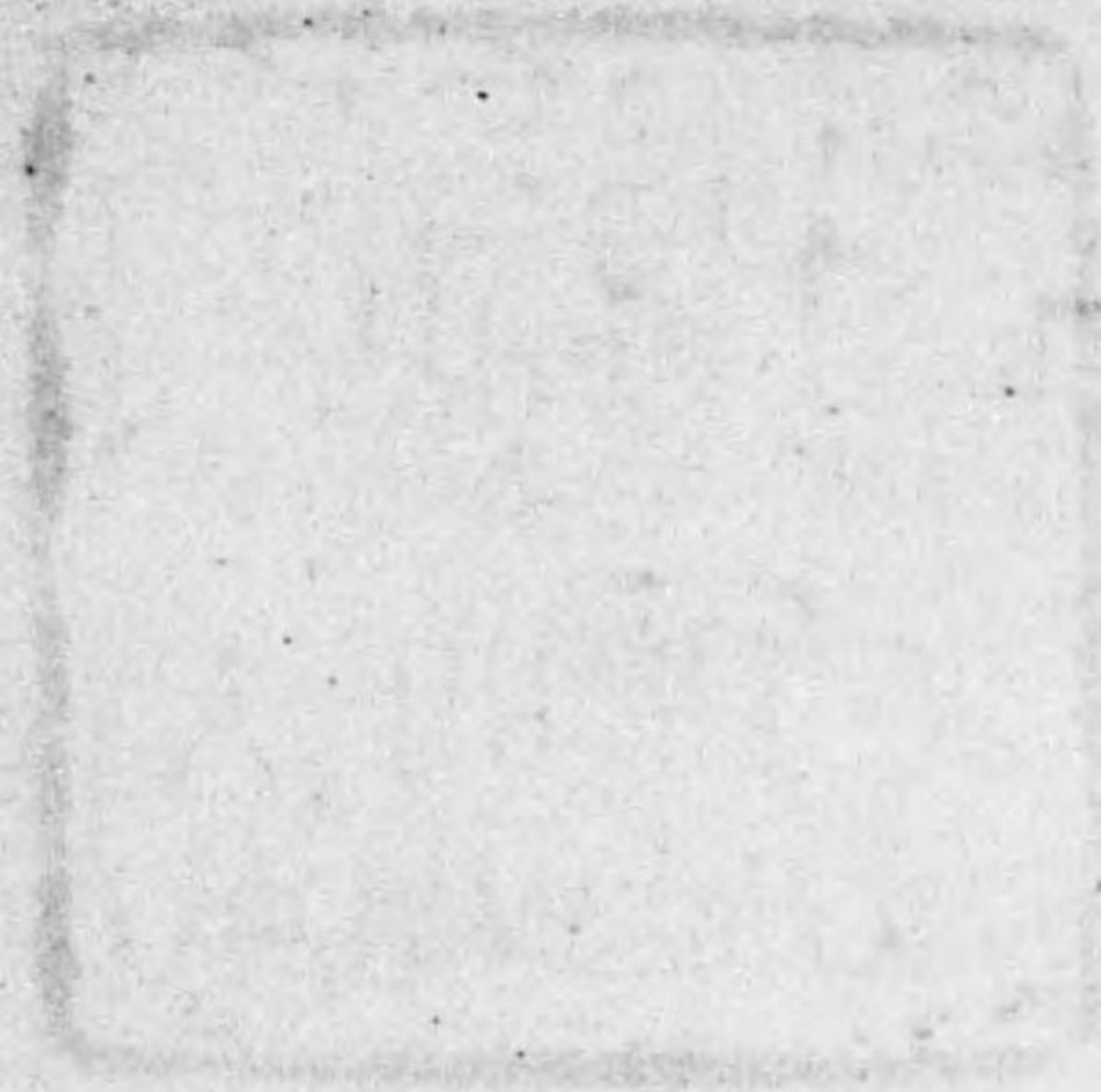


大正
14. 9. 29
内交

544-104

人間往來

與謝野晶子



何となく君に待たるるこちして出でし花野
の夕月夜かな

海戀し潮の遠鳴りかぞへつつ少女となりし父
母の家

祭の日葵橋ゆく花がさの中にも似たる人を見
ざりし



ほととぎす治承壽永のおん國母三十にして入りませる寺

七人の美なる人あり簾して船は御料の蓮さりに行く

水に咲く花のやうなるうすものに白き帯する浪速の子かな

家七室霧にみな貸す初秋を山の白湯めてこしやまろうど

戀はるとやすまじきものの物懲に亂れはててし髪にやはあらぬ

若き日のやむごとなさは王城のごとしと知りぬ流離の國に

かざしたる牡丹火となり海燃えぬ思ひみだる
る人の子の夢

花草の満地に白と紫の陣立ててこし秋の風か
な

春雨やわがおち髪を巢にあみて育ちし雛のう
ぐひすの啼く

遠方に星の流れし道と見し川のみぎはへ出て
にけるかな

物思へばものみなものううたた寝に玉の螺鈿
の枕をするも

をとうとはをかしおどけし紅き頬に涙流して

笛習ふさま

五月雨春が墮ちたる幽暗の世界のさまに
つづさけり

知恩院の鐘がさまさぬ人覺めぬ扇もとむるわ
が衣ずれに

大井川山は雄松の紺青とうすき楓のありあけ
月夜

夏の風山より來り三百の牧の若馬耳ふかれけ
り

相人よ愛欲せちに面瘦せて美しくしき子によさ
ことを云へ

ほととぎす安房下總の海上に七人ささぬ少女
子まじり

く 大赤城北上つ毛の中空に聳やぐ肩を秋の風吹

やはらかに寝る夜ねぬ夜を雨知らず鶯まぜて
そぼ降る三日

牡丹うゑ君まつ家と金字して門に書きたるひ
るの夢かな

水引の紅き二尺の花ひきてやらじと云ひし朝
露の路

白樺の折木を秋の雨打てば山どよみして鵲鳴
くも

十餘人縁に並びぬ春の月八坂の塔のひさし離
ると

みづうみに濁流おつる夜の音をあそれて寝ね
ぬ山の雨かな

やはらかき少女が胸の春草に飼はるる若き駒
とこそ思へ

天人の飛行自在にしたまふとひとしき程のも
のたのむなり

頬に寒き涙つたふに言葉のみ華やぐ人を忘れ
たまふな

今日もなほうら若草の牧を戀ひ駒は野心忘れ
かねつも

物思へば中にみじかき額髪しばしば濡れてく
せづきしかな

春の磯こひしき人の網もれし小鯛かくれて潮
けぶりしぬ

少女子はもろむき心花に似んこれは頼める人
なるものを

三吉野の櫻咲さけり帝王の上なきに似る春の
花かな

戀人は現身後生よしあしもわかたず知らず君
をこそたのめ

わが肩に春の世界のもの一つくづれこしやと
御手を思ひし

あらし山名所の橋の初雪に七人わたる舞ごろ
もかな

女をかした近衛づかさは櫻巻きて供奉にぞまゐ
る伊勢物語

夏の花原の黄萱はあけぼのの山頂よりもやや
明くして

くらやみの底つ岩根をつたひゆく水の音して
寝ねえぬ枕

つややかに春の灯ならぶ圓山へ法の火ともる
音羽の山へ

來啼かぬを小雨降る日は鶯も玉手さしかへ寝
るやと思ふ

これ天馬うち見るところ鈍の馬埴馬の如きを
かしさなれど

泣寝してやがてそのまゝ命絶えやさしき人の
からと云はれん

かたらひししるしに取りし小ゆるぎの磯の石
にも似たる菊かな

生れたる新しき日にあらずして忘れて得たる
新しき時

朝の雲いざよふもとにしきしまの天子の花の
山ざくら咲く

臘日の來ると野寺のうしろ籔穂すすきばかり
雪被くかな

かきつばた白き國には王います少女の國はむ
らさきにして

天竺の流沙にゆくや春の水浪華の街を西す南
す

二三騎は木の下かげにはたはたと扇つかへり
下加茂の宮

思ふ人ある身は悲し雲わきて盡くる色なき大
空のもと

高き屋にのぼる月夜のはださむみ髪の上より
うすものをさぬ

街の雨比叡の小雪のゆきかひにみぞれとなり
し京の北かな

秋の雲はかな心の人待ちに涙ながしてありと
思ひぬ

かはせみや前の流の圓ら石つぶつぶ乾き冬の
日の來ぬ

山寺の一重の櫻ちるに似てさびし夜明の星消
ゆる空

若き日の火中に立ちて相とひしその極熱のさ
かひにあらず

火に入らん思ひは烈し人を焼くほのほは強し
いづれなりけん

野分姫百人手とりしろがねの靴してきたる花
ぐさの上

あさましく雨のやうにも花おちぬわがつまづ
さし一もと椿

わが前に紅き旗もつ禁衛の一人と君をゆるし
初めにし

朝顔の蔓きて髪に花咲かば寝てありなまし秋
くるるまで

人の世にまたなしと云ふそこばくの時の中な
る君とおのれと

言葉もてそしりありきぬ思ふとはすこし劇し
く思ふことかな

白蘭の園に麒麟を放つ日もものはかなき歎
きをぞする

秋の雨わたり二間のわたどのの洞の中より灯
をもちてきぬ

おどけたる一寸法師まひ出てよ秋の夕のての
ひらの上

雨がへるてまりの花のかたまりの下に鳴くな
るすずしき夕

うき指にうす墨ちりぬ思ふこと恨むことなど
書さやめて寝ん

戀人の逢ふが短き夜となりぬ苗香の花たちば
なの花

わが髪かみの裾すそにさやさや風かぜかよふ八疊はちでふの室まの秋あき
の夕ゆふぐれ

文なのから君きみの心こころをいと多くたくはへつると涙なみだ
こぼれぬ

月の夜や木立も草の花もなし水をたたへて馬
だらひをおく

三尺のたななし小舟大わだにおのれ浮沈す人
あづからず

夕風や煤のやうなる生ものかはほり飛べる
東大寺かな

男にて鉢叩きにもならましを憂しやとかこち
うらめしと云ふ

一人はなほよしものを思へるが二人あるより
悲しきは無し

遠方のものの聲よりおぼつかない緑の中のひる
がほの花

あかつきの竹の色こそめてたけれ水の中なる
髪に似たれば

朝顔の小さな花はうら悲し戀しき人の三十路す
るより

赤とんぼ風に吹かれて十あまりまがきの中に
渦巻を描く

少女子の心亂してあるさまを萩すすきともあ
なとりて見よ

垂幕もとばりも春は襷つくれ思ふ人らのたは
ぶるること

佛などわが見及ばぬきはながら戀の如くにた
のまばよけん

戀をして年頃ふると髪白き長者の間ひに言ふ
こともこれ

十二まで男姿をしてありしわれとは君に知ら
れずもがな

わがよはひ盛りになれどいまだかの源氏の君
の訪ひまさぬかな

戀人は空のはてより遠方にやりつるものと旅
を思へり

青海に冷き秋の水おとす川二つある腰越のさ
と

ほととぎす白の袴の裾ならべ五たりいます法
華寺の衆

あらかじめ思はぬことを共に泣くかるはづみ
こそうれしかりけれ

龍騎兵いで入るたびに旗とりてわれをまもる
もこちたくなりぬ

わがたのむ男の心うごくより寂しきは無し目
には見えねど

棧道に夕日の照ればあはれなり危きものあ
からさまなる

あかつきのかのまた川の湯の樋より紅葉の中
にのぼる白雲

ひたひたと身を投げかけて思ふらく蛇の心の
われに現る

あさましき素肌の少女見る如き貝のからかな
真白けれども

薔薇咲きぬかつて夢寐にも知らざりし思ひご
とする人のほとりに

飽くをもて戀のつづきと思ひしにこの寂しさ
も戀のつづきぞ

雲流る多くの人にのぞかれて早書きをする文
の如くに

わが逢はん男の數を語れよと戯れつれば相人
は逃ぐ

初夏の楓の枝に藤ちれば花笠に似てなまめか
しけれ

天てらす神の御馬にわが子等が豆を食まする
朝霧の中

ことごとく因縁和合なしたりと思へる家も時
に寂しき

秋の夜の灯影に一人もの縫へば小き虫のここ
ちこそすれ

沖つ風吹けばまたたく蠟の火にしづくちるな
り江の島の洞

あけがたの山の岩間の湯にあれば近き雲より
小雨そぼふる

みづからを山の湯ぶねに朝くだる白き雲かと
おどろきぬわれ

相あるを天變さとし人騒ぎ君は泣く泣く海こ
えにけん

ねがはくば君かへるまで石としてわれ眠らし
めメヅザの神よ

おのれこそ旅ごちすれ一人ある晝のはかな
さ夜のあぢきなさ

おなじ世のこととは何のはしにさへ思はれが
たき日をも見るかな

休みなく火の心もて戀ふるなるわれにいつし
か君飽きぬらん

琴の音に巨鐘のおとのうちまじるこの怪しさ
も胸のひびきぞ

人の世の掟の上のよきこともはたそれならぬ
よきこともせん

わが息の虚空に散るもうれしけれ年の明けた
る一日二日

不可思議のよもあらじとて入りもこし女の心の
臓ならめ君

清らかにつゆよこしまの無きものにかの日の
戀もなりて終りぬ

三月の柳を折りてあまりにもものを隠さぬ風
流男を打つ

うすものの夏も寒げに見ゆるまで瘦せたる人
となりけるかな

わが子等がおしろいをもて青桐の幹に字かけ
ば鶯ぞ啼く

しろがねの燭臺一つ中に立ちしめやかなるは
三十路のころ

草むらに鬱金の一葉まじりたり透さとほりた
る秋風の中

あさ緑楓の木をば来てゆする夜明の風にまじ
れり胡蝶

大きなる日のおつるなど見ればうし思ひ上れ
るわが心から

わが閨の眞白き麻のふすまより十二時ごろの
月は出でけん

生れたる日のごと死ぬる日の如く今日を思ひ
てわれ旅に行く

わが泣けばろしや少女きて肩なてぬアリヨル
號の白き船室

戀人に逢はん日遠しふるさつを見ん日しられ
ずいかかすべきぞ

夕ぐれは車の卓の肱濡れぬ胡地のけしきの心
細さに

三千里わが戀人のかたはらに柳の絮のちる日
に来る

ああ阜月ふらんすの野は火の色す君もコクリ
コわれもコクリコ

わが小舟雨に濡れつつ白鳥とうちならびゆく
二時がほど

旅人の涙なれどもなごやかに流るるものか夜
の巴里に

あえかなる踊子きたりわが前に杯をあぐ灯の
海の底

月さしぬロアルの河の水上の夫人ビニヨレが
石の山莊

さまあしくいたくもものを思ふかな東の島に
子等をおくとて

目の前に霧のくだると思ふかな羅をかづきた
る人ぞきませる

海峡の燈臺の灯は明滅すわがおちつかぬ旅の
ここに

白塔の窓のあかりはうば玉のくらがりよりも
かなしかりけれ

象を降り駱駝をくだり母とよびその一人だに
走りこよかし

君とわれ高さに上り橋あまたかかれる水をの
ぞく夕ぐれ

おのづから大路の白き敷石に心ひかれて夕あ
りさする

酒場の地獄の給仕かのもその日のわざも
見透して云ふ

秋風は凱旋門をわらひにか泣きにか來る八つ
の辻より

わが車後に高き噴水の立つと思ふがこちよ
さかな

ひろくして盡さんともせず森のみち涙するま
で妬ましさまで

白鳥をもてあそぶため手を打ちぬはた嬉しさ
のおもひ出のため

唯だあるは黄金の王座と水晶の曇れる器旅人
のわれ

いにしへの君王の閨金色のまくらに通ふ秋の
初風

水晶すゐしやうの燈籠とうろうのもと白しろき手てを王わうに與あたへて人ひと歩あゆみ
けん

たそがれは森もりよりわれを追おふごとし君きみと踏ふむ
べき街まちの灯ひのため

さびしげに海うみに浮うかべりわが心こころエトナの火ひをば
なほ抱いだけども

ふらんすに君きみを殘のこしてわが船ふねのいづる港みなとの秋あき
の灰はい色いろ

南國なんごくの木この實みを吸すへば涙なみだおつ昨日きのふの戀こひの味あじに
似にたれば

船ふねに寝ねるいやはての夜よの思おもひなどあはれなり
けり女をんな心こころに

子を思ふ不淨の涙身を流れわれ一人のみ天國
をおつ

罌粟の花くづれしままを見る如く悲しきこと
はそのままにおく

春の朝春のまひるも夕ぐれも寂しさつづくお
のれとなりぬ

くれなるの桃の蕾を思ひつつ薬を飲みぬ病め
る三月

戀ならず仇にあらて友よりも忘られがたき人
にもあるかな

身の中に悲しみの湧く筋などのあるこころし
て手をながめぬ

船ふねに居ゐて陸りくに着つく日ひを思おもふごと戀こひのをはりの
時ときに思おもはる

今いまひと度たび西にしの都みやこの元朝げんてうに緋ひの帯おびしめてわれを
練ねらしめ

大空おほぞらの日ひの面おもてをば濡ぬらすごと菜なの花はなに降ふる春はる
の雨あめかな

花はなかをり鼠ねずみことことの嚙かめる春はるの夜明よあけのな
まめかしけれ

心こころいと正ただしき人ひとがいかさまに偽いつはるべきと思おもひ
みだるる

花はなよりも戀こひしき人ひとの顔かほよりも嬉うれしく思おもふ夕ゆふ風かぜ
ぞ吹ふく

心中をせんと泣けるや雨の日の白きこすもす
紅きこすもす

小鳥来て少女のやうに身を洗ふ木蔭の秋の水
だまりかな

初春のうら白の葉やかけなまし少し恨みのま
じる心に

老いぬらん去年一昨年の唯ごとのそのなつか
しさ極りもなし

日の暮は君の戀しやなつかしや息ふさがるる
ここちこそすれ

大空のうす黄の雲となりて散ることを宜しと
定めかねつも

しづかなる風の流のこちよき十一月の黒檀の夜

若くして思ひしこと目の目に見ゆれ白き扇をも
てあそびつつ

わが二十町娘にてありし日の面かげつくる水
引の花

やがて着ん秋の裕のおもはれぬかはたれ時に
しら雲飛べば

その心歎く時にもよく合ひぬ戀せばいかに哀
れなりけん

草むらを塔の如くに見する風吹く夕ぐれは寂
しかりけり

山の草水噴き上るかたはらにあぢきなしやと
空を見るかな

萱の葉のかたちにならふ人かとも自ら笑ふ思ひ
痩せつつ

こほろぎや男女の文がらの多さが中に埋もれ
て聞く

野の池のころもとなき皺に咲くうす藍色の
水草の花

雨降ればわれの若さに寂しさの入りくる門を
見るこちする

女の子啞の手振りをするこに飽く時降りぬ
夕立の雨

風吹けばはなればなれに花うごくつりがね草
のあぢきなきかな

この二人祭の日ぞと思ふことあまり多かる日
おくりをする

朝顔はわがありし日の姿よりすこし寂しき水
色に咲く

天上と地獄をもちし疑ひにまさらず君が懺悔
のあとは

君のみが戀人なりとわれ云はる長き懺悔をさ
けるしるしに

懺悔さき今たちかへり華めかん身になりぬと
も思はれずわれ

かにかくに君は君のみ知る世界われはわれの
み見つる日を持つ

わが船の汽笛に散るもはかなけれ紀の勝浦の
あけぼのの雲

いにしへの帝王達もよぢにける路絲のごと山
を這ふかな

うぐひすや百艘の船とどまれる洞にひとしき
山かげに啼く

河原には小家おかれぬ鳥來り砂に生みたる卵
のやうに

白き桶三つ四つ置かれせつなげにかなかな啼
ける夏木立かな

全身を口びるのごと吸ふ波をややうとましく
思へる夕

海の上つりがね草の袋よりやや赤ばみて夕立
ぞ降る

心など手にとりあげてながめなばいかに涙の
流れんわれは

水だまり五月の雨にくだけたる薔薇を浮べぬ
白鳥のごと

天つ神もしくはわれのいにしへが姿を見せて
慰めに來よ

香木の朽ちし匂ひを立つるなり黒き茸も白き
さのこも

抑へたる赤きとんぼの羽ばたきぬ戀かと思ふ
手ざはりをして

空樽の中よりいでし大やんま雲に入る時夕風
ぞ吹く

寒げなる薙の上にて手をかさね替女ぞいませる
心覗けば

いにしへを忘れぬ悪を人なしぬ忘れやすかる
男の中に

われ倦めば戀しゆかしと思はるる能なきさま
にうたたねぞする

大空へ魚みな上る夜のさまと月ある海の見え
もこそすれ

王宮の鏡の室より生れこし秋風めぐるこのた
わやめを

秋と云ふ生ものの牙夕風の中より見えて寂し
かりけり

假の身も水また雲のいにしへにいささかかへ
るここちす秋は

落日はつよき力をうち忘れ女のごとく戀のみ
に燃ゆ

いと高く穂上ぐるすすき大空の雲の心を覗け
る薄

とけ合はぬ繪の具のごとき雲ありて春の夕は
ものの思はる

思ふこと無げに美しくしいなあらずもの思はん
ともてる若さぞ

ほのかにも瓦の濡れし屋根を見て冬の初めを
悲めるかな

初めより目に見えぬもの消えさりしこのちど
ろきに勝るものなし

さばかりのめでたき帝いましける世もこの日
よりいにしへとなる

かしこかる御代の初めの宣命を待てる心のす
がすがしけれ

あなめてた南殿の母屋に天上のよそほひした
る高御座立つ

悠紀の殿主基の殿よりみあかしの洩るるを思ふ
清き夜半かな

まぼろしが幻として消ぬ薬われのみぞ持つ君
のみぞもつ

千よろづの言葉も唯の一言も云はぬも聞きて
悲し女は

あな戀し琥珀の色の冬の日の中に君あり椿と
なりて

誰ならん世の常事のかたはらに人を忘れん苦
行をつむは

ささやかに雲立ちのぼる少女子の羽子の板よ
り雲立ちのぼる

火のいとも銀絲の筋も見ゆるなり亂れごころ
の美しくしきかな

死ぬことも夢のやうなることながら重ぐるし
けれ戀に比べて

なげくこと多かりしかど死ぬきはに子を思ふ
ことよろづに勝る

人よりも母のつとめを知れるごと君あらぬ日
にふるまふは誰

身のうちにアマリリスより紅き花咲かせて二
人相見しものを

かにかくも皁月は悲しもの思ふ家のをぐらさ
外の明るさ

憎むにも妨げ多きこちしぬわりなき戀をし
たるものかな

折ふしに男の心迷はずばいやが上にもめてた
きものを

山風に雨の混れば濡れにけり黒き枯木も白き
枯木も

ひるがほの花の色する眩まげて假寝するまも
忘れぬものを

わが晝の雨の中なる百舌の聲こほろぎになれ
馬追になれ

大空のうち曇りつつうす色の梅など散ればさ
さらぎ終る

わが鏡顔かみかほはよけれど寒さむげなる肩かたのあたりはう
つさずもがな

七月しちがつやうすおしろいをしたる風かぜ歩あゆみきたりぬ
木の下行くだりけば

箏たんす笛すいより去こ年ぞのかたびらとりいづる手てさはり
などは何なんにたとへん

鬼おにの面めん狐きつねの面めんをきて遊あそぶ子こ等らを廊らう下かに吹ふく秋あき
の風かぜ

高たかき草くさ噴ふん泉せんのごと火ひの山やまの煙けむりのごとく風かぜにう
づまく

いと多おほく白しろ菊ぎく咲さきぬ戀こひと云いふことなどすべて
知しらぬさまかな

はしけやし白き孔雀をかたはらにおくこち
する中頃の秋

君とわが創造したる境にて一人ものをば思は
ずもがな

十月や野にあるよりも何よりもとくうらがれ
し屋根の草かな

いにしへのクレオパトラを飾りたる玉の色し
てめてたきダリヤ

この國に少女と生れ戀人とそだち心はやや華
奢に過ぐ

夏の花風のよすがに匂ふなり心と心通ふ日も
がな

花はな一つ胸むねにひらきて自みづからを滅ほろほすばかり高たかき香か
を吐はく

ことごとく石いし濡ぬれゆけば俄はかにも夜よのこころ
する山やまの家いへかな

後のちの世よを無なしとする身みもこの世よにてまたあり
得えざるまぼろしを描かく

木この下もとの池いけ菱ひし形がたにほの白しろき春はるの月つき夜よを忘わすれた
まふな

木蓮きれんの散ちりて干ひ潟がたの貝かひめける林はやしのみちの夕ゆふ月づき
夜よかな

ただ一人ひとり柱はしらによればわが家いへも御み堂だうのごとし春はる
のたそがれ

ありと聞く五つの戒の一つのみ破りし人も
のの歎かる

天人の一またたきの間なるべし忘れはててん
としごろのこと

苦しげにももの油のしづくするさまして終る
秋の薔薇かな

静かなる心はもてど身の作る華奢ゆゑわれも
春の花めく

そのかみの日の睦言を塗りこめし壁の如くに
寄りて歎かる

飛ぶ車空よりこしと春の日に袖振り歸る子を
ば思ひし

月見草雨ののちなる山松のしづくちるなり黄
にひらく時

灰色の雲の中にて山の鳥うらめしきこと思へ
とぞ啼く

わが子故マリヤの像の膝にあるエスさへ病め
るこちちするかな

夜の二時を晝のこちにゆきさする家のうち
かな子の病ゆゑ

わが庭の小米櫻がすすきより弱げになびく夕
月夜かな

秋の夜はわりなし三時人まてばあはれに瘦せ
しこちちこそすれ

半なかよく心こころにかなふ日ひの如ごとく半なかの寒さむくさびしき
日ひかな

手てに載のせて砂すなを吹ふけども濕しめりたる砂すなもおのれ
もなぐさまぬかな

元ぐわんじつ日も二ふた日も同おなじ爐ろのほとり君きみがかたへに春はる
をことほぐ

元ぐわんじつ日のひるのしづけさわが家いへも知しらぬ島根しまねの
ここちこそすれ

あぢさなし君きみが心こころの聞きえくる耳みみをもちつつ忘わす
れんとする

初はつ夏のあやめと早はやく定さだめてき人ひとよりすこした
ち勝まさるとて

もの云はじ山に向へる
こちせよ君に加ふる
半日の刑

思ふ人旅にやりつるたぐひかと悲しきことを
聞けば泣かるる

戀人の涙に似たる香を立ててうばら咲く日と
なりぬ武蔵野

子の飼へる五つの雛のにはとりがもの菜食
めり彌生朔日

初夏は夕も朝のこちする君に逢はねど見る
こちする

紫の魚と思ひてわれも行く海の底めく夏の月
夜に

空低く波より沫のちりしかと星も見えつつ涼
しき夕ゆふべ

戀人と假に定めしその日より涙ながれぬ君を
思へば

巴里にて虫啼かぬ夜をわびしやと思ひしこと
を病みて思へる

わが御者が角吹きやめば水の音高く鳴り出づ
山怒るごと

萱のびて尺に尺添ふ草ならてくる髪ならばを
かしからまし

母の顔木の間の月を見るやうに子は遠く見る
病してより

長持の蓋の上にてもの讀めば藏の窓より秋風ぞ吹く

麻を著て初めて蟬をさく日などあはれなりけり夏の盛りも

いつしかと月夜になりぬわが行くは天の川より長き坂かな

凋落も春のさかりのあることも教へぬものの中にあらまし

音立てて石の山にも降れよかし下の襟のみ濡らす雨かな

重ぐるし春ことごとくわが上に残りどどまる
ここちこそすれ

夏の空梅蘭芳の顔見ゆと月の上れば人のささめく

雛罌粟も身を逆しまになすはては茅の草より
寂しからまし

さかしげに君が文をばおさへたり柏の葉より
青き螳螂

目の前に淡雪ちりぬ何ごとも云はて死ぬると
言ふ形して

御言葉をよしときくのみ人に似ぬさびしき色の
花どころかな

靄立てば浴槽の底に桃李咲く園のありとも思
ひけるかな

戀の塵つもりゆくなる人の子が泉を浴びに入
りし山かな

何れにもひたさまほしきおのれかな温泉の中
冷泉の中

紫の傘して山を見に出てぬ旅より戀にこころ
ゆく人

下 溪川は雨に濁らずくれ竹の青き色すれ百尺の

日の暮の明星嶽の山風にすこし萎れし戀ごこ
ろかな

涙をば受けんと思ふさましたりいとあさまし
や水晶の盆

紫苑しえん咲さくわが心こころより上のぼりたる煙けむりの如ごときうすい
ろをして

過去くわこの世よは海うみより深ふかし白玉しらたまも珊瑚さんごもさぐりい
てがたきかな

明日あすと云いふよき日ひを人ひとは夢ゆめに見みよ今日けふのあた
ひはわれのみぞ知る

いかづちの生なるる熱あつき湯ゆの音ねをかたへにした
り今朝けさのくろ髪かみ

白鳥はくとうにまなぶ驕おごりもはかなしと泉いづみを出いでて今け
日は山行やまゆく

山吹やまぶきを遊あそぶ螢ほたると思おもふまで小暗こくらき溪たにの木下こしたみち
かな

娘むすめにて藏くらの板敷いたじきふみたるにまさり冷つめたきおく山やま
のみち

浅あさみどり風かぜにも散ちらんほのかなるはかなき色いろ
の榛はえの一ひとむら

心こころから身みもよもあらず散ちりがたの寂さびしく見みゆ
る夏なつの花はなかな

眺ながめやる沖おきの小島こじまのこちすれむら薄うすまだ若わか
やかにして

目めとづれば梅蘭芳うめらんぱうの幻まぼろしの見みゆるおのれもめて
たかりけれ

地ちに落おちし椿つばきはあなじはらかなのあまたとな
ほもより添そひて寝ねる

櫛の葉の魚のさまして這ひよるもさびしき園
となりけるかな

めてたくも二心なき雛をちく小さ人と親親の
ため

くれなるの尾をば櫻にかけたるは山鳥に似る
春の落日

光悦が金を塗りたる篋と見ゆ銀杏めてたき熊
本の城

なのりそを波の中より拾ふなり身にかかはり
のあるもののごと

君とあるくれなる丸の甲板も須磨も明石も薄
雪ぞ降る

ことごとく鏡かがみのありてうつるともうつらぬほ
どの小ち悪あく心しん

戀こひをする人ひとの中なかよりおのれをばけづらんとし
て旅たびに出いてけん

よき車くるまあまた通かよひぬ初夏はつなつのころの上うへの敷しき石いし
のみち

夕ゆふべにはもとの蕾つぼみにかへるなり花菱草はなびさうになるよ
しもがな

心こころより早はやくはしこく動うごくなどわが扇あふぎをば思おもふ
ものかな

秋風あきかぜの打うちとけぬごと吹ふくものか街まちの女をんなも寂さびし
きものを

一人居てほと息つきぬ神曲の地獄の巻にわれ
を見出でず

おもげにもかかりのしづく夕月の光の中にお
つる山莊

もの云ひてわれの立てるは小板橋君が立てる
は弓形の橋

寒き風清きひかりの通ふとて窓を悲む階上の
客

雲なども来てなびくかと廣やかに高く寂しく
見ゆる家かな

旅路より都に入れば龍宮のうろくづのごと人
のうつくし

二十六都の北の洞門をくぐれば草に秋風ぞ吹く

しらじらと雲と水との起き出づる浅間の山の朝の溪かな

日の落つる方も見えずて暮れゆけば心さびしき山莊の客

水の音烈しくなりて日の暮るる山のならばし秋のならばし

うら悲し北の信濃の高原の明星の湯にわがあ
ること

山の菊かづらのさまに靡くなりたのみ合はて
はさびしきがため

目の前に蘭陵王を舞ふとんぼいみじく清く日
の暮れてゆく

雑草の二人静は悲しけれ一つ咲くより花咲か
ぬより

しろがねの笛の細さも燃ゆる火の焰のはしも
嘗むるくちびる

曼陀羅のかの極樂の樓臺にながむる如き春の
夕映

夕風の渡ると見えてはかなげにつり橋うごく
草のおくかな

身の半焰に巻かれ寂光の世界を見るも戀の不
思議ぞ

しら玉をさぐる海人よりときめきて薔薇の園
生の夕闇を行く

劫初より作りいとなむ殿堂にわれも黄金の釘
ひとつ打つ

いささかの朱泥の葉をばとどめたる木の枝う
ごく夕月夜かな

君は君われはわれをば忘れずと歎きぬ少しわ
れを忘れて

樂みを極めしのちの人のごと寂しなど云ふわ
れもはかなし

今知るはつひに天馬の走せ入りし雲の中なる
寂しさにして

悲^{かな}みも羊^{ひつじ}の肝^{きま}のあつものも昨日^{きのう}となればこと
ならぬかな

何^{なに}ごとか知らずかがりの燃^もえに燃^もえ宿^{やど}のある
じに叱^{しか}らるる馬^{うま}

雲^{くも}間^まよりむら雨^{あめ}こぼれ馬^{うま}濡^ぬるる明星^{みやうじやう}の湯^ゆの前^{まへ}
の庭^{にわ}かな

渚^{なづさ}より大^{おほ}湯^ゆの靄^{もや}のたちのぼり第一^{だいいち}の坂^{さか}つばき
花^{はな}ちる

伊^い豆^づの雨^{あめ}柑^{かん}子^こ椿^{つばき}はやしなへど旅^{たび}の心^{こころ}の上^{うへ}にお
よばず

都^{みやこ}にて見^みたりし夢^{ゆめ}の續^{つづ}きをば見^みしあはれなる
朝^{あさ}ぼらけかな

浴泉ゆせんに耽たふれど魚うなのさがならずものうち思おもひ涙なみだ
こぼるる

波なみかへる天城あまぎの嶺みねのしら雪ゆきのここより海うみへく
づるる如ごとく

ひまもなく鷗うみづらみとぶなり樓船ろうせんにあるこちする
階上かいはうの客かく

觀魚洞くわんぎゅうどうよこを過ぎゆく浦島うらしまの竹たけの棹さかのみほの
白しろくして

悲かなしみも心こころに知しりしことわりもやがて忘わすれし温ぬる
泉せんの毒どく

朝あさなれば沖おきの方かたへといぬ波なみも日ひに靡なびくかと美う
くしきかな

湯ぶねより春の渚のしら波に身をよそへつつ
出づるたはぶれ

愁ひつつわれと豆相の温泉をめぐるに似たり
鳩色の雲

十の國見んと思はず戀人の心を覗く山のあれ
かし

山なれど籠にやしなふ鳥のごと羽まろくして
立つ椿かな

ある夜半に雪の外なるあられ來て雪を踏むな
りボルカのやうに

立春の日も寂しけれ遠近の木の下の雪蠟の色
して

或時は蜂のうなりにまがひ降るくらき大木の
下かげの雨

五月雨時の流のとどまらずゆくとも見えず同
じ日つづく

越の國かかる幾重の山なみのいづくを裂きて
われ來りけん

霧迷ふ信濃の溪を立ち出でて北海に來ぬ秋風
とわれ

ほととぎすわが赤倉にこし日より亂れ心とな
りにけらしな

聞を吹く妙高おろし烈しけれ戀もうらみもこ
れにゆづらん

わが山につづく海晴れ空の晴れ飛魚と見ゆ秋
の夜の星

妙高の裾野のみちは廣けれど中に藻のごと
たどり茂る

観音の千手のやうにことごとくひとしき丈の
赤倉の杉

日の射すを山のおもてと思ひしに夕月いでて
さま變りけり

北海を湯ぶねに覗く人の世を戀しと思ふ天女
のやうに

何故に雲とさかひの入りまじる山踏むことを
ならひ初めけん

上つ毛か越かいづれぞ旅人に悲しき音の水を
おくるは

秋の水もの惱みして曇るなり信濃の澁の山あ
ひに入り

ほととぎすわれは五更のゆぶねにて戀の涙を
洗はんとする

人人と霧をへだてて立つこともさびしき山の
夕まぐれかな

秋風や千曲の川の船橋はたなごころほど中低
くして

春の雪勸進帳の強力のごとあてやかに歩むも
のかな

賜はりし牡丹に代りもの言はん長安の貴女人
を怨まず

十日してたしかに春の來ることを知るは太鼓
をうてる子等のみ

白鳥が生みつるものこのちして朝夕めづる
水仙の花

物見臺さることながら目をとちてわれは木の
葉のちる音をさく

秋の薔薇おち葉する木のもとに居てうす紫の
夕月を待つ

夕方は霜がれ時の朝よりも雁などわたり若や
かに暮る

はなやかに見ゆれど秋の落日はただ一重のみ
くれなるを著る

歸りこんものと思はず大海へしづみ入るべき
いさり灯と見ゆ

雑木より薄の丈のたちまさりその穂眞白くな
びく山かな

よそにして思ひしよりも冷たけれ砂丘の上に
一人坐れば

網乾せり梅蘭芳の輕羅よりかしこきものをも
てなすやうに

唯聴かず鏡が浦をゆく船にもいふべき潮
音の臺

音羽屋がゆたかに踊るふりを見てうら安の世
と思ひ初めてき

義理に泣く小春役者は悲しけれわが見るうち
に身の細りゆく

雨降りて青磁の色に濡れゆきぬ銚子へかよふ
松山のみち

この度は犬吠岬の燈臺の冷きいろにおどろか
ずわれ

その日より波いくかへりかへりけん過去も未
來も知りがたきかな

波寄れば未央の園の白蘭のちりしくみちをゆ
くここちする

よろほへる豫言者の船新しき二十ばかりの若
人の船

二階より緑の鳥の覗くをば夕月めくと君に云
ふかな

洞門や箱根の溪の夕風の身に沁む人はたちも
隠れん

星一つ溪間の灯よりはかなげにまたたく山の
頂の空

物思ふ人より早く眠りたり水の彼方の明星が
嶽

ひるがほはいづくに見てもわが脱ぎし衣とお
ぼえてあはれなつかし

山莊さんさうの冷つめたき書庫しょこの露臺ろたいよりひらくを見みたる月つき
見草みさうかな

巡禮じゆんれいを待まつべからざる塔たふなればならひを破やぶり
九萬尺くましかに立たつ

蔓草つるくさのごと知しらぬまに丈たひのびて子このかへりな
ば悲かなしからまし

煙けりあ上げ雨あめのつまづく初夏はつなつの榛はんの大木おほきにほど近ちか
く立たつ

山やまの雨あめ溪たにへおつれば音ねもせずなほ雲くもとのみ呼よ
びてあらまし

かんばしく丹朱たんしゆを敷しきて流ながれたり伊香保いかほのお
くの極熱ごくねつの川かは

灯ひのにじむ雨あま夜の山やまも温泉おんせんの代た赭しゃの色いろにかよ
ひたるかな

くれ竹たけも春はるの初はじめは青銅せいどうの寒さむき色いろして風かぜに鳴な
るかな

涙なみだち圓まのもつるる面白おもしろさいてゆの紋もんはわれ
のみぞ見る

伊豆いづと云いふいてゆの國くにをゆきもどりすれば心こころ
も春風はるかぜとなる

ゆぶねより小波こなみつくり急いそぐなり月つきの世界せかいへゆ
く湯ゆのやうに

湯ゆを浴あびて伊豆いづにむすびし夢路ゆめぢより續つきしみ
ちは洞門どうもんの断たつ

狩野川を越え鹽屑の洞門を出てても馬車は天
城に抱かる

日のくれに白き馬つけ伊太利亞の車も出づる
多比の洞門

何すらん船の數ほど人居たり口野の浦の春の
たそがれ

御空よりわれを認めし星おちぬ人の戀ほどた
めらはずして

山國の西も東もしらぬなり雨と日かげのこも
ごもに降り

桂川高き樺のかけにして鷹の巢めさし樓より
ぞ見る

御空より半はつづく明きみち半はくらす流星
のみち

戀と云ふ身に沁むことを正月の七日ばかりは
思はずもがな

わがちし奈落の底に燃ゆる火も衰へがたと
なりにけるかな

風來り白き朝顔ゆらぐなりこだまがもてる口
びるのごと

たそがれの砂丘に風の渦巻けばさびしき雲に
乗るこちする

何ごとにものごりしたるかたくなに縦に咲き
たる木蓮の花

何となくうらはかなけれ空見れば正月の日の
西に傾く

昨日となしつることが明日逢はん世のこころ
して思ひ亂るる

何とかや四萬の名所の谿谷の底に青めるわが
涙かな

いなづまを山の宿屋のひろ庭に眺めて秋を待
たんとすらん

樋の水は後ろにしたるきりぎしの朱をうつし
つつ零れてぞ行く

何となき草の匂に親みて砂湯の人ともいへ
るわれ

水音の急なる川は陰となりとなりの川の眞白
き月夜

かはほりの羽をもちたる山ありて溪をおほへ
り月のぼれども

あのがみち見出てしやうに月影をたのみて水
の走る川かな

七八人新湯の川の水上に踏みて遊べる水晶の
板

橋に出て月を見るなり山なれば岩屋の口に立
つこちする

静かなる二十四時の過ぎぬればかへりくるな
り山の端の月

あはれにも金鏝したる月と見ゆ尾花の溪の霧
厚くして

霧の夜のあはれなりける月に似て青くくもれ
るいたどりの花

石佛の顔不思議なりなつかしや戀しやと云ふ
人にくらべて

あぢきなしへりくだれども人知らず思ひ上る
はまして見知らず

東京をすこし曇れる夕月のあかりに覗くあま
つかりがね

山の草女なれども花咲けど口びるの夢見るも
のも無し

大空の光が渡るかるさもて山をおほへる秋の
穂すずき

心おさわづらひがちに紅葉する北の箱根の仙
石の溪

夜明けぬと掌をばうつ水のもとに走りぬさび
しけれども

飛び立たんさまざましたりし朝の山巒のやうや
く濃くなりけり

薄の毛逆立つことのはれなり何におそるる
うらの草山

空はいと高く寂しきところぞと乙女峠になが
めて下る

日の見えず長尾の山の頂になほ金色の手はあ
けれども

風起り山の方より落葉吹く大地を濁すけぶり
のやうに

つくゑなる白きすゑものこの中へ落葉何しに
身をまきにけん

とこしへにおなじ枝には住みがたき身となり
ぬらし落葉と落葉

桐の葉は鼠の尾とも見ゆる尾を清らにあげて
土にいとへる

月明しこれは闇夜に住みなれしち葉ならめ
とあはれなりけれ

鼓つづみより笛ふえのはやしにうつりたる霰あられののちの初はつ
春はるの雨あめ

伊豆いづの奥天城おくあまぎの山やまを夜よるこえぬ寂さびしきことに馴な
れはてぬれば

片側かたがはの長ながき溪川たにがは夕月ゆづきが流ながす涙なみだのこちこそす
れ

烈はげしかる天城あまぎあろしの身みに沁しみむと河津かみづの橋はしの
泣なけば渡わたらず

半身はんしんを天城あまぎあろしにまかせつつ谷津やづの湯ゆぶね
にあるあぢきなさ

藤原ふじわらの湯ゆののどかなり夜よとなれどただ肱ひぢまげ
て晝ひるぬるごとし

天城山まことに雲の凍りたるつららと知りぬ
頂にして

滑らかに青をのべたる大空と離れて乾く一月
の山

ことごとくものを捨てたる形する葉蘭の雪の
たなごころかな

いたるべき處も過去も薔薇をもて今日は埋め
て君と酔はまし

春雨の降り埋めたるホテルかな熱海のみちの
きりぎしの下

夕暮の曇れる海に向ひたるテラスの椅子の乏
しかりけれ

いつしかも浴泉戒と云ふものを心に立てし人
なりしかど

女湯も海豚のあるに隣りたるこちおぼゆれ
海近くして

網代岬魚見が岬と重れるシユワルサロンの朝
の横顔

青海をわが裾に引く裳の如く見るはテラスに
つづきたるため

海鳴るやホテルの庭の芝草のつくりところは
さりぎしにして

ふくらみし帆のこちする芝山を出て踏め
どももの思はる

頂いたゞきを今日けふは網代あじろの奥おくに見みる天城あまぎの溪たにの雪ゆきさえ
ぬらん

うぐひすは皐月さつきに聞きくがなまめかし身みもうす
色いろの衣ころもなど着きて

雲くもの峰みねありとあらゆる蟬せみの身みに熱あつの發はつして鳴な
き出いづるころ

到いたるべきところにあらぬ世よを見みせて醒さめたる
夢ゆめと思おもひなさまし

なつかしや文ふみを賜たまはずうらめしやなど云いふは
てもさびしからまし

浮うかびてははかなきものと見みゆれどもわがたけ
磯いその船ふねに勝まさらず

越しがたきくろがねの輪のこちすれ沼津に
つづく長さ松原

わが馬車は富士の左の縁金の線をかしくみ退
きて行く

あぢきなしわが手にとれば乾網はうすものな
らで鎖にぞ似る

青きもの夕月こころ海のうへ藤のしたかげ消
息の紙

七月の夜能の安宅みちのくへ判官おちて涼風
ぞ咲く

われの名に太陽を三つ重ねたる親ありしかど
さびし末の日

人のごと唯だ一いろの悲みに埋れてあるわが
身ともがな

休みなく時が断つなるこし方のその外にある
こし方の夢

「人間往來」の後に

私は明治三十四年に初めて第一の歌集「みだれ髪」を版にしました。此の「人間往來」はその「みだれ髪」以來、昨年公にした「流星の道」と云ふ歌集までの作から、更に自ら選んで一冊にまとめました。凡そ廿三四年間の歌を之に代表させたこととなります。

之を選ぶに當つて、すべて原作のままを探り、少しも改削を加へぬことにしました。今の氣持で改め、ては原作の心を失ひ、その時の實感に遠ざかるであらうことを恐れたのです。すべて推敲はその製作の時から餘り隔たらない間にするので無いと不自然な結果になると思ひます。

私は自分の生活の重要な表現として、いつも真剣に歌を詠みます。それで今の作家のやうに濃厚な歌壇的意識を以て作ったものは一首もありません。特に此事を正直に書き添へて置きます。私の歌に、私自らが楽しみ、私自らが苦んだ跡はありますが、他に勝たう、他に誇らうと云ふやうな影は全く伴つて居ません。この事は私の歌を読んで下さる人人が知つて居て下さるであらうと思ひます。

一九二五年九月

與謝野品子

發 兌		大正十四年九月十五日印 大正十四年九月二十四日發行	人間往來 定價 一円八十錢
	著者 興謝野品子 發行者 山本美 印刷者 松井勇	東京市芝區愛宕下町一丁目一番地 東京市芝區愛宕下町二丁目一番地	改 造 社 東京市芝區愛宕下町一丁目一番地 電話 東京八四九〇三三番 電報 高輪四九三番

現 代 代 表 自 選 歌 集

第 二 回						第 一 回					
土岐善麿著	前田夕暮著	若山牧水著	窪田空穂著	與謝野晶子著	北原白秋著	木下利玄著	折口信夫著	中村憲吉著	古泉千桎著	島木赤彦著	齋藤茂吉著
空	原			人		立	海	松	川	十	朝
を				間			や		の		の
仰	生			往			ま		の	ほ	
							の				
							あ			と	
							ひ				
ぐ	林			來		春	だ	芽	り	年	螢
近	近	近	近	送定 料價	近	送定 料價	送定 料價	送定 料價	送定 料價	送定 料價	送定 料價
刊	刊	刊	刊	一 二八 八〇	刊	一 二八 八〇	一 二八 八〇	一 二八 八〇	一 二八 八〇	一 二五 八〇	一 二五 八〇

544

104

終

